

【 14 】

氏 名	岩 城 秀 夫 いわ き ひで お
学 位 の 種 類	文 学 博 士
学 位 記 番 号	論 文 博 第 50 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 45 年 1 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	湯顯祖研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 小 川 環 樹 教 授 重 沢 俊 郎 教 授 佐 伯 富

論 文 内 容 の 要 旨

湯顯祖（1550—1616）は明代における傑出した劇作家として知られる。詩文にもすぐれ、一世を風靡した古文辞派の主張に反対し、思想上では王陽明の門人中の一派（いわゆる王学左派）や僧達観（紫柏真可）とも交わりが深かった。官吏としての生活は、その反骨の故に順調でなかった。本論文は、それらの面からの検討を通じて、明代文学史に占める湯顯祖の位置づけを目的とする。

本論文は上下二篇に分れ、各篇は（上）八章、（下）五章、すべて十三章より成る。

上篇は「湯顯祖の伝記」と題し、第一章において、かれが会試の受験にあたり（万暦五年1577）、時の宰相張居正の誘いに屈しなかったため、その年より連続落第したが、その事件が一生の最初のつまずきであったいきさつを述べる。

第二章では張居正の死（万暦十年1582）の翌年ようやく進士となり、十二年（1584）文化の都であった南京の太常寺博士に任ぜられた顯祖の生活とその地の文人たちとの交遊を叙する。

第三章では、当時の文壇をほとんど独占した古文辞派の中心人物であった李攀龍・王世貞らの所説とかれらの作品に攻撃を加えた顯祖の主張が、袁宏道らの公安派に刺激を与えたこと、また明末清初ころの有力な学者・文人であった錢謙益にも大きな影響を及ぼしたこと等を論述する。

第四章では、万暦十九年（1591）顯祖が時の大臣らを非難した上奏文がもとで宰相申時行らに憎まれ、広東徐聞県の典史（下級官吏）へ左遷された始末と、この辺地での経験が後の戯曲の作中に取り入れられたことをしるす。第五章では、罪を赦され（1593）浙江遂昌県の知事に進められた顯祖が在任5年間にあげた治績と生治を述べる。第六章では、万暦二十六年（1598）報告のため北京に赴いた顯祖の辞表提出（いわゆる棄官）とその理由および三年後の罷免などを叙し、第七章で、二十六年以後、江西臨川県の家に帰った顯祖の生活を述べ、この間に、かれの思想に最も強く影響した僧達観と李贄（李卓吾）らの死に及ぶ。李卓吾は王学左派の中でも最も大胆な思想家であった。顯祖は多くの友人を失ったすえ、万暦四十四年（1616）卒した。

第八章では、顕祖の史学者としての一面をみるべき宋史の研究につき論じて、かれの刪定した「宋史」（または宋史記）の編修の方針が明末以後の史学者に少なからぬ示唆を与えたことを説く。ただしその書は稿本のまま少数の学者に知られたのみで散逸してしまった。

下篇では顕祖の戯曲5種について詳しく論ずる。（第一章）紫簫記（第二章）紫釵記（第三章）還魂記（第四章）南記と邯鄲記のおのの成立年代を考証し、それぞれ「藍本」となった旧小説との関係を説く。特に著名な還魂記については、従来の学者が誤解していた点を正し、作者の本ずいた小説の存在を立証したあとで、この作品の構成の特色と文辞の彫琢によって万暦時代の許多の戯曲の中で最高傑作と推される所以を明らかにする。

第五章は「戯曲構成の技法と理論」と題し、中でも顕祖の戯曲がすべて夢を筋書の最大要素とする点を取り、まず中国文学における夢の扱い方を概観して元の雜劇のそれに及び、還魂記にあっては夢と現実のからみあいによって筋が展開する技法に注意し、さらに夢を人間の抑圧された感情の解放された自由の世界とみなす点に、顕祖の文学全体に対する考えの延長をみる。また夢がある場合は現実につながり、単なる偶合とし難いのは、顕祖の経験した実感でもあったことが、かれの詩の実例を求めて論じられる。曲律——劇中の歌詞と曲の旋律の間に存すべき微妙な関係についてのある種の法則——に厳格であった（戯曲史上、呉江派とよばれる）流派の代表者沈璟（1553—1589）らの意見を顕祖が無視したこととその理由についても論じられている。

最後の「結語」においては、湯顕祖が北宋初年の一大編纂物「冊府元龜」一千巻を校訂したこと（かれの校本は伝わらない）と、宋代の「詞」（詩餘）の選集「花間集」をかれが愛読し、自ら評を付した本を作ったことなどをして、かれの多方面な学識の一端を示している。

論文審査の結果の要旨

湯顕祖は明代における劇作家として最も著名であり、これまでの文学史家はその戯曲史上での地位に目をそそいで来た。本論文は、もっと広い角度から、かれを単に戯曲作家としてだけでなく、文学の多くのジャンルにわたって特異な見解を有し、かつ実作を残した人として全面的にとらえようとした試みである。その試みは成功したと言いうる。

上篇は湯顕祖の伝記の研究であって、官僚としてはむしろ失意の境遇にあったかれの一生において、かれの（戯曲その他の文学）作品に何らかの形で影響した多くの事柄を細かに述べる。故にこの篇は一見平板な事実の叙述と考証に終始するようであるが、本論というべき下篇の所論への裏づけとなる如く書かれている。

その論証は最近の研究者たち、特に徐朔方氏の「年譜」（1959上海）に少なからぬ部分を負っているけれども、著者はその事実の一つ一つについて根拠となった資料を、できる限り、再検討したのちに採用している。例えば「明実録」の該当記事は出处を確かめ、また顕祖と直接に関係のあった文人たちの詩文集などにつき、わが内閣文庫所蔵の明刊本等を検索する労をいとわない。故にその考証は決して徐氏らからの単なる孫引きではなく、十分信頼することができる。

それだけでなく、著者は顕祖の広汎な教養について語る。特に少年期からずっと「文選」の愛読者であ

ったこと、それに伴う駢文の制作に注目し、またかれが当時の文壇で勢力を有した古文辞派へはげしい攻撃を行なったことに関心をむける。これは重要な指摘であって、顕祖が作った最初の戯曲2種（紫簫記と紫釵記）が白（せりふ）にまで駢文の装飾を施し、戯曲におけるいわゆる駢綺派の一人に数えられる原因をなした。駢曲のせりふは、それまでは俗語でつづられるのを常としていた。顕祖以前の明の文人たちに駢文作家というべき人が稀であったことも明らかにされていて、戯曲以外の駢文の作家としても、顕祖は明の駢文学史上、その再興者としての位置を占めたと考えられる（第三章）。

そして顕祖が、一方では、古文辞派を攻撃し、人びとが顧みようとしなかった唐宋の散文に新たな価値を認め、その主張は、かれよりのちの公安派などの恰頭に大きな刺激を与えた。この論証もまた明代文学史の研究において、小さくない問題の提起であろう。

下篇では、顕祖の戯曲5種すべてを取りあげて、その一つ一つの筋書を追いつつ、そこに見られる各の作品の特色および他の作家の戯曲との比較のほか、著者の分析は精細綿密を極めている。制作年代の考証も前人の所説を正し、一步をすすめた。特に「還魂記」はその他の4種と同様に「藍本」となった旧小説の存在が当然想像されるが、著者はその確証を見出し、この問題はほぼ解決されたと考えられる。

顕祖の作った戯曲がすべての夢を中心に構成されていることを論じたところ（第五章第一節）は、かれの制作の秘密を解く手がかりである。著者が「顕祖は夢を通して抑圧された情を解放した」と言い、「それは同時に顕祖自身への慰藉であった」と言うのは正しい。しかし顕祖が元の雜劇「漢宮秋」や「梧桐雨」の如く「夢から醒め現実の悲哀をかみしめて終る」構成をとらず「夢と現実の結びついた極限の形を示すものとして「還魂記」は書かれている」と著者が言うとき、「極限の形」の意味はやや明白を欠く。著者が別の処で言うように、明代の戯曲は才子と佳人を主人公とするものが多いが、そのマンネリズムを破るために夢の神秘性がもちこまれたと考えるべきであろう。それでも顕祖の場合に大きな成功を収めた理由への考察はやや不十分である。

それらいくつかの小さな瑕は有っても、著者の説こうと欲した所は明快に述べられ、考証の確かさと作品の分析の緻密周到な用意の上に立てられた結論は、概して人を首肯せしめる。中国戯曲史の研究家として長い間にわたってつづけられた著者の努力の結実として、この論文の価値は国の内外を通じて高く評価されるであろう。

なお参考論文10篇は、いずれも、中国の戯曲史ないし演劇史の諸問題の解明に寄与する所がそれぞれ有って、著者の造詣をうかがわしめるに足りる。

以上審査したところにより、本論文は文学博士の学位を受けるに値するものと認められる。